

〔平成十一年度大会パネルセッション2〕 特別掲載2・総力戦の思想

## 戦時期日本の精神科学

宇野田 尚哉

### 1 カントからヘーゲルへ

両大戦間期の日本における哲学的言説の展開を概観してみると、そこには、「カントからヘーゲルへ」という言葉で捉えることのできるような、ゆるやかな関心の移動が見出される。すなわち、大正教養主義の背景の一つをなしたとされる新カント派的哲学思潮から、ヘーゲル弁証法（どうよりもむしろ、ヘーゲル弁証法を超える新たな弁証法ないし歴史哲学）への、関心の移動である。

このような関心の移動の根柢にあつたのは、ヨーロッパ中心主義をいかに脱し、ヨーロッパ近代をいかに超えるか、

という問題意識であった。そして、このような課題への取り組みは、当時、相互に連関する二つの方向性においてなされたと言える。すなわち、一つは、世界の文化的多元性を強調してヨーロッパというトポスの特権性を否定するという空間的（＝文化多元主義的）相対化の方向であり、もう一つは、同時代の世界秩序をまさに克服されつつある古い世界秩序と捉えながらそれを超える新たな世界秩序を歴史哲學的に展望する——すなわち、ヨーロッパ中心の近代的、世界秩序を超える現代的、世界秩序を歴史哲學的に展望する——という時間的（＝歴史哲學的）超克の方向である。

両大戦間期の哲学的言説に見られるこのような展開が、当該期の世界的構造変動によって促されたものであること

は、あらためて言うまでもない。大戦を契機としたヨーロッパの荒廃とアメリカの大國化、ソビエト連邦の成立と植民地ナショナリズムの高揚、といった事柄が、文化多元主義的世界理解の形成を促すとともに、歴史哲学的新世界秩序構想——揺らぎつつある旧世界秩序を超克する新世界秩序の歴史哲学的構想——の形成をも促していったのであり、また同時に、そのような超克の主体としての自国像の形成をも——多元主義的文化論と歴史哲学とに支えられながら促していくのである。

——対立の構図

一九三五年二月以後の天皇機関説排撃・国体明徴の動きを背景として同年十一月に設置された教学刷新評議会においては、当時の主流派イデオローグ（帝大・高師・精研などに所属する日本精神論者や国民道德論者ら）と、前節で見たような哲学的言説を担う少数派（具体的には、西田幾多郎・田辺元・和辻哲郎）との対立が、あらわになった。

両者の対立が顕在化したのは、第三回総会（一九三六年一月）においてであるが、その際に西田らが一様に強調したのは、我が国の「精神科学」は「未だ幼稚ノ域ヲ脱」していない、ということである（第三回総会議事録参照）。これ

は、彼らの現に對峙している論敵に対する批判であると同時に、既存の「精神科学」を革新することで「近代の超克」の道筋を示すことこそがいま日本で「精神科学」に携わっている者の負つている世界史的使命である、という、彼らに共通した立場の表明でもあつた。

### 3 「世界史」の立場と「民族」の問題

第一次大戦後の世界的構造変動に促されて成立・展開した文化多元主義的・歴史哲学的言説の担い手たちは、文部省の信任厚い主流派イデオローグとの対抗関係に立ちつつ、また陸軍の援助を受けた民間右翼からの攻撃に抗いつつ、のちには海軍と結びつきながら、独自な時局介入的言論・思想活動を展開していくことになる。そのような時局介入的言説を主として担い全面的に展開したのは、高山岩男・高坂正顯・西谷啓治・鈴木成高ら、西田よりものちの世代の学者たちであった。

ヨーロッパ世界の、非ヨーロッパ世界への帝国主義的膨張は、世界を一体化した。しかしそれは、ヨーロッパに成立した近代的、世界の外延の拡大にすぎなかつた。ところが、いまや、非ヨーロッパ世界の台頭により、この近代的世界は崩壊に向かいつつある。「近代的」世界とは異なつた

秩序と構造とをもつ現代的、世界が、或は眞実の意味に於ける「世界史的世界」が（高山岩男『世界史の哲学』）、成立してきつつあるのである。非ヨーロッパ世界で唯一近代化に成功した日本が、近代的世界の中心、心勢力たる米英と、アジア諸民族を指導しつつ戦っているこの大東亜戦争は、近代的世界から現代的世界への転換という世界史的意義をもつた戦争である。——先行する東亜協同体論と入れ替わるようにして、一九四〇年前半から一九四三年半ば頃まで論壇を賑わせた「世界史の哲学」とは、およそそのような論理構成をもつた、歴史哲学的であると同時に政治的な、時局介入的言説であった。

このようないい言説における〈近代の超克〉の具体的中身について、鈴木成高は、「政治においてはデモクラシーの超克……、経済においては資本主義の超克……、思想においては自由主義の超克……」と説明している（鈴木「近代の超克」覚書）が、この説明にはさらにもう一つ、『國際関係においては民族自決主義の超克……』といふことが、付け加えられねばならない。彼らにとっては、ヴエルサイユ条約の精神であり国際連盟の精神でもあつた民族自決主義は、現に克服されつつある近代的世界の精神にほかならず、米英を中心の帝国主義的な旧世界秩序の論理にほかならなかつた。そこで彼らは、この現に克服されつつある民族自決原

理に対し、「広域圏」という考え方を掲げる」とになる。その際に彼らの関心の中心に位置していたのが、日本を中心とする「広域圏」の問題、すなわち、「東亜共栄圏」の問題であったことは、言うまでもない。結局のところ、「世界史の哲学」の負つた最大の課題とは、文化多元主義的・歴史哲学的言説でもつて「東亜共栄圏」の理念を立ち上げること、言い換えるなら、そのような言説でもつて「大東亜ノ各国家及各民族ヲシテ、各々其ノ所ヲ得シ」（一九四二年一月二十一日東條首相議会演説）めるという日本の戦争目的を理念化すること、にほかならなかつた、と言える。

#### 4 「國家総力戦」から「共栄圏総力戦」へ

ところで、「世界史の哲学」は、たとえば高坂正顕『民族の哲学』（一九四二年）に見られるように、日本の特殊性や優越性を言い立てるだけの彼らの論敵たちは異なつた域内他民族への視座を、それなりにもつていた。彼らが、帝国主義をも、民族自決主義をも、そして British Commonwealth をも超えた、「東亜共栄圏」のあり方——日本を指導国として「万邦」が「各々其の所を得る」ような、力ではなく道義による広域的地域秩序——を考えようとしていたことだけは、確かである。

このような視座を有する彼らにおいては、総力戦は、「共栄圏総力戦」として理念化されることになる。すなわち、域内諸民族の主体性への視座を一応もつてゐる彼らは、

「国家総力戦」を「共栄圏総力戦」へと転化させるべきこと、そうすることで「国内秩序」を「転換」すると同時に「国外秩序」をも「転換」すべきこと、つまり、日本を指導国として域内諸民族を「最高度」に「組織」化した「共栄圏総力戦体制」を「建設」すべきことを説いていくことになるのである（高山「総力戦ト思想戦」参照）。域内諸民族を最高度に組織化した「共栄圏総力戦体制」の建設を説く彼らのこののような総力戦論は、日本の特殊性や優越性を言い立てるだけの論敵たちに抗いながら文化多元主義的・歴史哲学的言説でもつて「東亜共栄圏」の理念を立ち上げることを課題とした彼らの立場の特質が最もよくあらわれた思想的局面であつたと言えるだろう。

おわりに

日本の敗戦は、「世界史の哲学」を担つた人々が日本に見た世界史的使命が錯誤に過ぎなかつたことをあらわにした。彼らは、戦後に至つても自らの歴史哲学的立場を維持していくが、しかしその彼らにおいても日本の負つた世界

史的使命への言及は消え、かわりに「文化国家の理念」（戦後最初の高山の著作の書名）などが論じられるようになつていく。

彼らにおける戦中と戦後の連続と断絶という問題については、論じられるべき事柄が多いが、本稿の文脈において指摘しておかなければならないのは、彼らは、戦争の理念化をやめたとき、同時にそれも非常にたやすく、その前提としてあつたはずのアジア諸民族への視座をも放擲してしまつた、ということではないか、ということである。

日本思想史研究という領域にあつては、東アジア・東南アジアという広がりのなかでアジア太平洋戦争という総力戦を捉え、さらにはその戦後への「遺産」をそのような広がりのなかで見通していく、という視座は、決定的に欠落してきたと言える。山之内靖らによつて提起された総力戦研究の枠組も、この点では問題を残したままである。ここでは、さしあたり、「世界史の哲学」の構成した「共栄圏総力戦」という戦争理念は、全くの反面教師としてではあるが、アジア太平洋戦争の経験を東アジア・東南アジアという広がりのなかで考えていくことのできる研究枠組の構築

私たちにもとめている、という点を指摘して、さしあたつてのまとめとしたい。

(神戸大学専任講師)